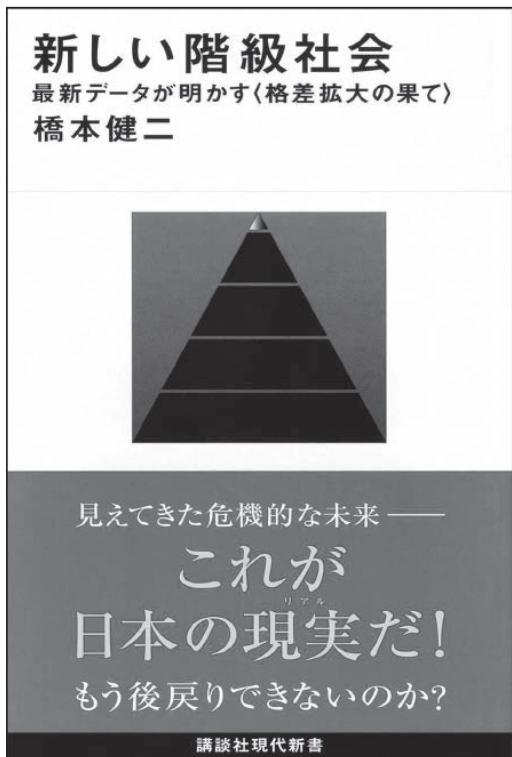


橋本 健二（著）

『新しい階級社会』最新データが明かす〈格差拡大の果て〉

（講談社）



昨今の物価高の折、それに比して所得の伸びが追い付いていない現状においては、経済的に厳しい生活を強いられている人々も少なくないだろう。かつては「総中流社会」などと言われたこともある（しかし実際には格差は存在した）日本社会ではあるが、2000年代以降は「格差（社会）」という言説が流布するようになった。本書は、そうした経緯をふまえつつ、2020年に生じた新型コロナ禍を経た後の格差状況の現在地を、「階級」を軸にしつつ鋭く描写する。

序章で述べられているように、人々がそれぞれ

奈良女子大学人文科学系教授 林 拓也

の人生を歩んでいくときの岐路（進学・就職など）で立ちはだかる「壁」は、多くの場合「階級の壁」であり、それは往々にして人の行動を制約し、自由を奪う。しかし、人々の生においては階級という「舞台装置」から逃れることができない宿命にある。階級という舞台装置を知ることで、読者は自分自身の立ち位置とそれを取り巻く社会状況を客観的・俯瞰的に見ることが可能となるだろう。

本書でとくに焦点を当てているのが、日本において存在感を増しつつある新たな下層階級＝「アンダーカラス」である。その階級は、非正規雇用として働く人々（パート主婦を除く）から構成され、他の階級と比べた場合に、収入・資産・貧困といった経済状況において最下位に位置するだけでなく、仕事上の自由度や仕事から得られる満足感が低く、結婚して家族を形成することが困難であることも統計データから明らかにされる（第1章）。

この階級が誕生した背景として筆者が指摘するのは、現代の資本主義が「フレクシ=グローバル段階」に到達したことである（第2章）。この段階における特徴は、生産活動に必要な資本・労働力・情報などの生産手段が、グローバルな規模で、不斷に流動し続けることである。その結果として先進国では、高度な技能と判断力を必要とする高

賃金の職業と、低賃金の単純労働の職業とに分極化する。後者の状況が「非正規雇用のアンダークラス」を大量に産み出したというわけである。

アンダークラスに属する人々の中には、不遇な経験をたどってきたケースが多い。父親がいない（母子家庭）、または父親が不安定就労であった割合が他の階級と比べて高い、学校での成績が低いだけでなく、いじめを受けたり不登校になった経験・学校中退の割合が高い、卒業後ただちに就職するという「新規学卒一括採用」のルートから外れやすい、といった事実がデータから明らかにされる（第3章・第6章）。ただし、彼らすべてが必ずしも最初から不安定な就労状態であったとは限らない点に留意が必要である。最初に就職した時点では、正規雇用で働いていた（新中間階級や正規労働者階級に属していた）ものの、その安定した職を失って非正規雇用（アンダークラス）に流れ込んだという人々も一定数見られるのである。このような流動性ゆえに、非正規雇用者は失業や無業にも陥りやすい。失業者・無業者もまた、非正規雇用のアンダークラスと同様、あるいはそれ以上の経済上・生活上の困難を抱えている（第4章）。

2020年に端を発した新型コロナの流行によって大きな打撃を受けたのが、アンダークラスと旧中間階級（自営業）であった（第7章）。彼らは感染率そのものは低いものの、「感染の疑い」比率が高いことから、感染が疑われるにもかかわらず仕事を続けたのではないかと推察する。新型コロナが猛威を振るっている間、勤務先が休業せざるを得ないなどの理由により勤務日・時間が減少し、収入減を経験したり、貧困率が高まった。これとは対照的に、ホワイトカラーの仕事に従事する新中間階級は、在宅勤務が増え、勤務日・時間が減ったにも関わらず収入が減らなかった人が多いなど組織によって手厚く守られている。

推計890万人を数えるまでに膨れ上がったアンダークラス——失業者・無業者を含めた「広義のアンダークラス」は総計で1000万人を超える（第1章・図表1-1）——は、未婚率が高いので、家族形成・親子間継承を通じた再生産が行われない可能性が高い。にもかかわらず、アンダークラスが縮小することはない。現在の資本主義がその労働力を必要とし続けるため、他の階級が産み育てた子どもたちがアンダークラスに飲み込まれていくのである。このような「ブラックホール」としてのアンダーケラスの特質は、衝撃的かつ重要な指摘である（89頁）。

果たして、このような形の資本主義社会は持続可能なのであろうか。現在の日本では、政治に関わる人々の態度にも大きな分断・対立が見られること（第8章）も相まって、将来を悲観する見方にとらわれがちである。ただし、階級による態度の違いは決定的に大きなものではなく、人々の間で一定の合意が得られるような形で問題解決への処方箋も示される。たとえば、人々の生活を支えるために不可欠な、主にアンダーケラスが担ってきた労働の価値を正当に評価し、所得そのものの格差を縮小していく必要性。また、大資本との競争で厳しい環境にさらされ、新型コロナ禍によって疲弊した旧中間階級（自営業）をある程度保護することで、当事者のみならず、人々の生活を豊かにすることにもつながる可能性などである。

本書の副タイトル＜格差拡大の果て＞が含意するのは、現在の格差状況が特定の人々（アンダーケラスの当事者など）にのみ影響を及ぼすにとどまるものではないということである。私たちは「同じボートに乗っている」のであり、緩やかながらも相互に影響しあって、それぞれの生活を、そしてこの社会を営んでいる。このことをあらためて心に留め置きながら、多くの人々に本書を手に取ってもらいたいと願う。